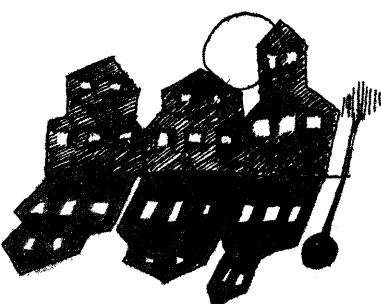


人間の成長における行為の意味

持つことと失うこと(1)

津守 真



子どもの行為には意味があるということを、私はくり返し述べてきた。その意味はだれにとつてのことかと言えば、まず子ども自身にとってである。子どもはそれをどのくらい意識しているかは知り難いけれども、意味を認めていなかつたなら、それほどまで熱心にある行為をすることはないだろう。そのことを大人が認識するとき、子どもの行為は大人にとつても意味を持ちはじめる。

保育するときには、ともかくも大人は子どもの行為に関心をもっている。そして更に子どもの視点を理解したいと思う。それをいくらかでも大人が理解しうるとするならば、それは大人の中にも子どもと共通の考えがあるからである。一見無意味のように見える子どもの行為に、大人が意味を発見するとき、子どもは理解者を得て、自分の行為を更に展開

させる。

大人が生きる上で問題に感じていることは、子どものときから異った場面で体験してきたことの積み重ねの上にある。大人の体験は子どものときの体験から継続している。それらは決して同じものではない。成長の途上で新たな局面に何度も当面して確認し直され、つくりかえられて現在に至っている。こう考えると、子どもの行為の意味は、成長する人間にとつての意味でもある。子どもの行為にふれて大人が発見する意味は、子どもの視点あるいは大人の視点のいずれか一方からのことではなく、両者を含めて、人間が文化を形成するために何度も問い合わせてゆく努力にかかわっている。

このような観点から、私は、子どもの行為の中に見出される人間の文化に連なる意味を考えてゆきたいと思う。

まず現象から

いま私が毎日の保育の中でかかわっている子どもの現在のことからはじめる。

五歳のT夫は、九月のある日、流しで調理用のボウルに水道の蛇口から水を勢いよくいれ、水が一杯になるとザーと流し、水が排水口から流れゆくのを見ていた。このことを何十回もくり返した。私は傍で見ていくうち、この子が一年以上にわたってやりつけてきた、トイレットペーパーを水洗便所に流すのと同じことをやつてることに気が付いた。T夫は水洗便所のフラッシュを押して水を勢いよく流し、トイレットペーパーをち

ぎつて落とす。そして水が便器の排水口から流れ去つてしまふまでじつと見つめ、しまいに頭を排水口に突つこんでのぞき、床に耳をつけて音が次第に遠ざかるのを聞いた。そして立ち上がつてまたフラッシュを押しトイレットペーパーをちぎつて流すのをくり返した。ほとんど毎日、一時間以上もト夫はトイレで過ごした。（このことをしなくなつた経緯は、本誌の88巻5号に記してある。）

私が水をボウルに入れて流すときは、食器を洗うという目的意識が先に立ち、その行為に伴う感覚を意識しない。子どもがこのことをくり返すのは、実用的目的のためではない。この行為 자체がこの子にとって意味があるにちがいない。そこで、子どもとつき合つときには、大人の側の功利的な目的意識を棚上げにして、子どもがしていることに、あるがままにあれることが必要なのだと私は考えている。そうすると、子どもの思いがこちらに伝わつてくる。そこで何が起つていたかを考え直すと、その行為の意味が少しづつ見えてくる。

ここに述べたボウルの水を流すことと、トイレットペーパーを流すことを対比させて記してみる。

ボウルの水を流すこと

- 1 水道の蛇口から水を勢いよく出し、ボウルに水をいっぱい入れる。
- 2 その水を手のひらで数回打つ。
- 3 ボウルの水をひっくり返して流し、排水口に流れ去る水をじつと見る。流しの下の

戸棚をあけ、排水管に耳をあてて聞く。

4 以上のこととくり返す。

水洗便所にトイレットペーパーを流すこと

1 フラッシュを一杯に押して水を勢いよく出す。水は渦を巻きながら便器にたまる。

2 バスルームの壁にトイレットペーパーをわざり水の上に落とす。

3 トイレットペーパーが水と一緒に排水口に流れ去るのをじっと見る。水道管や床に耳をつけて遠ざかる水の音を聞く。

4 以上のこととくり返す

いずれも、水を勢いよく入れることからはじまる。このことにT夫はエネルギーを注いでいることがわかる。水にトイレットペーパーを落とし、あるいは手で水を打って、水の流れを単に鑑賞するのではなく自分とかかわりあるものとする。容器に一杯にたまつた水が流れ去り失われるのをじっと見つめ、耳で聞く。

外なる行為は内なる意味をもつ

容器や便器にたまつた水が排水口の中を通つて流れ去る。どこかに流れていってしまうのを、子どもは水音が聞こえなくなるまで聞いている。

このことに思いをひそめたとき、すぐに心に浮かんだのは、この子が保育園にいっていたときの母親喪失の体験であった。私共のところにくる以前に保育園にいっていたT夫

は、登園するとすぐに母親から離されて、帰るまで泣いていた日がつづいたという。このトイレの水を流す行為は、子どもの側に視点を移してみるならば、手もとにあったものの喪失の体験とその感覚の反復ではないか。

このように気が付くと、子どものこの行為がとてもいじらしく見えてくる。

傍にいる大人が常に声をかけて存在を確かにとしておかないと、すっとどこかに立ち去ってしまうような自我の稀薄な子どもだから、この子自身の一部ともいえる母親が立ち去ることはほとんど人格の崩壊を招くものであつたろう。直観的にそのことに気付いた母親は、保育園をやめさせて、しばらくの後、養護学校にすることになったのである。一年以上、母親はこの子の傍を離れることができず、この子も母親を手放さなかつた。T夫は、トイレットペーパーを水に流すことにより、こうやつて母親は暗い排水口の向こうに失われてしまつたのだよと私共に伝えていたのだろう。また、あの喪失の体験は何だったのかとの自分自身の疑問が解けるまで、何度もこの行為を反復していたのだろう。

私は長い間、毎日くり返されるこの遊びの意味は明瞭でないままに、T夫がトイレで水を流している間の多くの時を、母親と共に傍に一緒にいた。このことは、喪失とは反対に、いつも大人が離れずにいることを確認していたことになる。その安心感に支えられて、T夫は喪失の遊びを反復した。

あるとき、もうそろそろ母親がいなくとも大丈夫だらうと、母親に外に出てもらつたことがあつた。それに気付いたT夫は泣きながらふらふらと歩き回つた。その姿に普通でな

いを感じさせられて、直ちに母親に付添つてもらった。そのときから一年以上を経たいま、朝母親から別れるとき、T夫は眼前でバイバイと手をふつて母親が去ることをたしかめる。

失ったものが再び得られること

最近、T夫は、高い所に上つてボールを投げてもらい、それを投げてまた投げ返してもううことをくり返す。一度失つたものが、再び手もとにもどつてくる遊びである。T夫にとっては特に意味があることはすぐに分かる。母親が立ち去つても、また迎えにくることを、T夫ははつきりと認識している。

いろいろな子どもの母親が門から出てゆくのを眺めるのも好きである。出てゆくことはもどつてくることを内に含んだ行為である。

行為の意味を発見することの意味

最初からおぼろに認識していたのだろうが、こうしてボウルの水を流すこととトイレットペーパーを流すこととを対比して、T夫の喪失体験がこの遊びに表現されていることを明瞭に認識したとき、私とT夫との関係は変質したようと思う。同じ行為の反復につき合つても、その時間を長いと私は感じなくなった。むしろそれほどまでにこのことを反復して確かめる子どもにいじらしさを覚えた。そんなとき、子どもはいままでに見せた

ことのない笑いの表情を私に見せてくれた。ようやく理解してもらつたという気持ちだったのかもしない。

子ども自身が長い間心の中に抱いていた疑問がこうして解けた後、子どもはどうするのだろうか。私がそんなことを考えはじめたとき、ある日、T夫はソファに身を沈めて長い時間ゆったりと過ごした。これまで、移動するときには走り回っていたのに、他の子のロッカーの中の物を手にとったり、通りすがりに見つけたおもちゃにさわったり、この子どもの世界がひろがったように思えた。大人も、心の疑問が解決したあと、次のことへと移るのに、無為に過ごす過渡的な時期がある。T夫は水を流す遊びをはなれて、新たな活動へと向かいつつある。

人間の成長の中で考える

幼年期の早い時期、存在感がまだ確かでないときに、母親など子ども自身の存在を支えている基盤の喪失を体験したとき、そのダメージを回復するには、本人も周囲も大きな努力を払わねばならない。そしてこの子どもはかくも早い時期に、失うことの意味を探求した。もしもその疑問が解決されないままに進むならば、人間が育つてゆかないだろう。

能力や知識が増してゆく成長期には、新たに獲得することによって、人は自らの中に力量を感じ、自我が強められる。その中にも失う体験が織りなされていて、ある程度の自我が形成された人は、獲得することと失うこととの意味を自分で発見してゆく。挫折や運

命的喪失にあたって、失うことをマイナスとだけ考えるのではなく、それは予期しない別の側面が開かれる契機であることを認識するのが人間である。

壮年期になつて子どもを育てるようになると、保育者は、子どもが自分で遊べるようになるまでは十分に手をかけるが、ひとりで遊びはじめたらそれに干渉することなく、（自分のものとして保持するのではなく）、手放すことを会得する。他者としての子どもと自分の区別を認識し、子どもが自らのアイデンティティを形成するためには、大人は自分自身のある部分を抑制する。成長期に、獲得することと失うこととの意味をくり返し考える機会があることによって、それは可能になるのではないか。

そして老年期になるにつれて、獲得するよりも失うことには積極的な意味を見出すに至る。人間の付属物が失わることによって、その人の本来の個性が明瞭になることを知る。そのときには付属物に固執していると、失うことによって開かれるはずの自分自身の新しい側面が見えてこないだろう。

獲得することと失うこととは、人間の生涯を通じてくり返し直面する体験であり、そのため新たに考え方を改め、理解を深めてゆく人間の行為である。

(愛育養護学校)